**「「反日」中国の文明史」**（ちくま新書、2014年7月）

2021年6月23日　小林

* 著者は平野聡、1970年生まれ、東大院卒、東大院準教授。
* 前回の研究会では、「中国は6年以内に台湾に軍事侵攻する」との米国軍司令官の発言に刺激されて、主に中国・日本の軍事力について報告したが、今回は中国という国を見るための視点として、中国文明についての本をご紹介したいと思います。本書では、題名が示すとおり、中国の「反日」思想がどこから出てきたものなのかが明らかにされています。
* 以下を読んだうえで、『中国』について思うところをおおいに放談したいと思います。

**中華文明と儒教**

* 中国の伝統的な世界観は上下関係・差別の関係。物事にはすべてに上下、優劣がある。上の者・すぐれた者が下の者・劣った者を徳で導き、思いやりを示す、下の者・劣った者は上の者・優れた者をうやまう。これで社会が調和すると考える。
* この考え方は、伝統的な政治体制においては、朝貢関係となる。野蛮な国が文明国中国に貢物を贈り、その返礼に莫大な品々を恩寵としてもたらす。中国は、朝貢はうながすものの、来ない国には無理強いはしない。これで世界平和は保たれる。
* 中国の伝統的な世界観・地理観は、中国を世界の中心として同心円状に野蛮な国がある。「中華」という文明が隆盛な地域は、中国18省＝中原のみ。
* 儒教で説かれる「礼」は、この上下関係の世界を調和させるための大切な要素となる。上は下を慈しみし、下は上を敬う。これで社会は調和する。国もまた同じ。野蛮国は中華を敬わなければいけない。
* 家庭における「礼」の第一は、家長への礼であり、さらに重要なのはその祖先への礼である。つまり、祖先崇拝。だから今でも中国では族譜(詳細な家系図)が作られ、各人の上下関係が明確になっている。同じ宗族の人たちは単に同じ宗族ということだけで親密になる。

**中国による異民族支配－内モンゴル、チベット、新疆ウイグル自治区**

* 中国は、北部・南部・西部・東部で民族が異なり、言葉も異なる。顔かたちも異なる。でも、同じ漢字を使うことで一体感が醸成されている。特に中華18省については同じ漢民族の国という意識がある。
* 清の時代に、今の内モンゴル、チベット、新疆ウイグル自治区を支配下に収めたが、清の漢人高級官僚から見れば、それらの地域には、儒教も漢字もないことから、中国の一部とは認識されなかった。他の朝貢国と同列の「外藩」に過ぎない。逆に、それらの地域の人は、その地域が中国の一部だなどと思っていなかった。なお、「新疆」とは、清が新たに支配することとなった「新しい土地」といういい意味です。
* これらの地域では、儒教文化は根付かなかった。乾燥した寒冷な地域では、上下関係を尊重していたら生命の危険がある。体力や才覚こそがリーダーの条件である。

**異民族による中国支配－モンゴル人、満州人、そして日本人?**

* 余談だが、中国は、彼らがさげすむ野蛮な国に2度も支配された。1度目はモンゴル人の元帝国であり、2度目は女真人＝満州人の清帝国である。数え方によっては3度目もあった。つまり80年前の日本による支配である。つまり、満州の植民地化と中国沿岸部の軍事占領である。
* 日本は、中国が日清戦争(1895-5年)で敗北したことと、さらには日中戦争で敗北したことで(形式的には戦勝国になったが)、中国の歴史上最大のトラウマとなっている。このような歴史を背景に、中国人は現在でも、日本を軍事的な脅威と見ている。だから、日本の首相が靖国神社に参拝に行くと、「軍国主義の復活!」とか「中国侵略を反省していない!」と声高に叫ぶ。
* 元も清も漢民族にとっては、野蛮人による中国支配であり、これは漢民族にとってはなんとも我慢ならないことだった。だが、(1)首都を北京に置いたこと、(2)従来どおり科挙の試験で漢民族が高級官僚に取り立てられたこと、(3)支配者側が中国語（北京語）を話すようになったことで、「中華」の世界観があやういところで維持されたぎりぎり許容範囲であった（なんとか自分を納得させていた）。

**日清戦争敗戦のショックと日本脅威論**

* 日清戦争での敗北は、中国にとっては中華文明の否定という意味で激しいショックであった。つまり中国＝儒教に基づく中華文明は、近代的な西洋思想・西洋技術で軍隊を整えた日本というちっぽけな野蛮国に負けたということ。
* 近代的な西洋思想によれば、国際関係は上下関係ではなく平等の関係で、万国公法＝国際法がこの平等関係を規律している。中国は日清戦争の敗北で、強制的に対等な国際関係の中に自らを位置づけなければいけなくなった。この結果、日本と結んだ下関条約は、中国にとっては屈辱の歴史となっている。これが遠因となって現在の尖閣問題になっている。これについては、後述します。
* さらに日清戦争の15年後、日本は、朝鮮という中国にとって最も従順な朝貢国を併合した(1910年)。さらに、中国北部の満州を植民地にした(1932年)。その当時、中国にとって「軍国日本」は最大の脅威であった。この感覚が、今日の中国人の中に今でも残っていて、これが反日感情の根っこにある。
* 清は、英国とのアヘン戦争(1840-42年)に負けて香港を奪われ、他のヨーロッパ諸国も中国を草刈場とした。これに対して、清・中華民国は、これに対抗するため、「同文同種」の日本との団結に期待していた。ところが、「同じ漢字を使い、同じ黄色人種」の日本は、英国等と同じ振る舞いをした。すなわち、朝鮮併合そして1915年の「対華21カ条要求」である。日本からの借款に依存しきっていた中華民国・袁世凱政権は、これを受け入れざるを得なかった。中国人にとっては日本に裏切られたという思いを強く持った。この時点から中国は「反日」にかじを切ったのである。
* ちなみに、対華21カ条要求は、満州・蒙古における日本の権益問題や在中国日本人の条約上の法益保護をめぐる21カ条の要求で、交渉の結果、最終的には13カ条で合意。中華民国政府が受諾した5月9日は、当時「国恥記念日」と指定されていた。ただし、現在はない。

**中国の文明開化と簡体字**

* 中国における文明開化運動の一例として、「新文化運動」と呼ばれている啓蒙運動がある。その中心人物は陳独秀(1879～1942年)。早稲田大学に留学して西洋近代の学問を学んだ彼は、中国にサイエンスとデモクラシーを定着させるためには、中国語の改革が必要と考えた。当時の中国語の問題点は、①口語と文語の隔たりが大きい。②口語の文法と発音が各地域で様々。これでは共通の国民意識がつくれない。彼の考え方は現在の簡体字の誕生につながっている。ただし台湾は共産党との違いを示す立場から今でも旧字・繁体字を使い、書き言葉も難解な文体を維持している。

**中国儒教文化と中国共産党**

* 1921年、中国共産党が誕生。前述の陳独秀も設立メンバーの1人。この共産党設立の背景には日本の影響が多く見られる。陳独秀は早稲田大学留学、周恩来は明治大学留学。陳も周も日本でマルクス主義に触れた。漢字が多く使われている日本語の文献は、中国人には分かりやすかった。共産主義も社会主義も日本で誕生した翻訳語であり、今でも中国で使われている。なお、当時の中国人の日本留学は、日本が近代社会に生まれ変わったことへの憧れが背景としてあった。
* 儒教文化を身につけた中国人にはマルクス主義は親和性があった。つまり、科挙に合格した官僚が貧困に苦しんでいる民をいつくしんで、現世＝経済社会を改良して民を救うという考え方は、儒教的な考え方だが、マルクス主義も貧困に苦しんでいる民をいつくしんで、現世＝経済社会を改良して民を救うという点は同じ。ここに儒教とマルクス主義の親和性・共通性があった。
* 中国、朝鮮、ベトナムという儒教文化圏では共産党政権が生まれ、日本には今でも共産党があるのは、この儒教との親和性のためである。
* 余談になるが、北一輝(1883～1937年)の代表的著作は、「国体論及び純正社会主義」と「日本改造法案大綱」であるが、このような著作が示すように彼の思想は、社会主義的な考え方で昭和維新を起こさなければいけないという考えにつながる。この考え方が二・二六事件を起こした青年将校たちに大きな影響を与えた。毎日農村出身の兵士と接する青年将校たちは、彼らから困窮する農民の状況を知ることになり、これを救わなければいけないという思いがあった。これが二・二六事件の一つの要因であった。ここにも儒教的な考え方が見えるように思う。
* とはいえ、二・二六事件は単なる「暴発」で終わってしまった。その一方で、毛沢東およびその同士たちは、共産党を組織し、資金源を得て、同調者をつのり、武力を整えていった。日本と中国の状況の違いはあるのだろうが、二・二六事件の青年将校たちにはとても「日本的なもの」が見られるのに対し、毛沢東とその同士たちには「中国的なもの」が見られるような気がします。

**毛沢東と武者小路実篤**

* 毛沢東(1893～1976年)は農村地主出身。北京での師範学校の学生時代、日本留学帰りの中国知識人が持ち帰った近代的な考え方に触れて農村改良を目指すことになる。そのきっかけとなったのが、日本帰りの北京大学教授が執筆した「日本の新村」という本。これは武者小路実篤(1885～1976年)が創始した「新しき村」を紹介する本。集団労働で収穫を平等に分け合うという考え方で現在も埼玉県毛呂山町(ﾓﾛﾔﾏﾏﾁ)で社団法人として活動している。毛沢東はこれこそが中国の農村を救うと確信した。これがきっかけで、毛沢東は共産主義に目覚め、彼の「農村革命論」につながっていく。
* 毛沢東が共産革命の力点を農村に置いたことが、現在の農村戸籍と都市戸籍の分離につながっている。中国では今でも農村から都市への戸籍移動は許されていない（だから、農村の子どもが都市に移り住むと小学校、中学校に入れない）。さらに、毛沢東の「大躍進計画」の失敗がもたらした経済の大混乱により、食えなくなった農民が都市へなだれ込むことを防ぐためにも農民を農村に縛り付けておくことが必要だった。ちなみに、この経済の大混乱により3千万人から4千万人の餓死者が出たと言われている。

**文化大革命と経済発展**

* 文化大革命は中国の経済発展の基礎を作った。文化大革命は、大躍進計画の失敗で失脚した毛沢東が、北京大学の学生をたききつけて起こした権力闘争。「毛語録」を掲げて現政権の反毛沢東派官僚を反動・反革命とレッテルを貼り、暴行を加え殺害まで行った。これはインテリといわれる一般市民にも向けられた。運動は過熱して、抑え込もうとすると逆に反動・反革命とレッテルを貼られつるし上げに会った。これで誰も手が付けられない状況になった。毛沢東の死亡(1976年)により文化大革命は終息したが、あとに残されたのは、既存の価値観の否定であり、すさまじい精神的荒廃であった。こうなると信じられるのは金だけとなり、拝金主義が蔓延した。これが皮肉にも文化大革命後の中国の経済発展の基礎となった。怪我の功名。

**中国人の歴史認識と日本の影響**

* 日本の歴史学者による世界史の記述は、「東洋史」と「西洋史」という分け方で記述されている。この歴史の分け方は、日本に留学した中国人には新しい発見だった。特に梁啓超(横浜中華街で13年間亡命生活)は、この考え方を彼が執筆した歴史書の中で紹介している。東洋史は中国を中心にした歴史の記述であり、これは近代アジアでも中国が中心になるべきだという考えを生んだ。これが現代中国人の世界観、歴史観になった。
* つまりは、日本人の歴史認識が現代の中国人の歴史認識を形づくっているということ。ちなみに、梁啓超は清の時代にクーデターに失敗して日本に亡命、その後帰国して袁世凱政権に参加、司法総長等を歴任。
* さらに、梁啓超は「中国の武士道」という文章を著し、本来中国民族にも備わっていたはずの武士道が長年の専制権力の下で忘れられているのであり、中国武士道を復活させよと訴えた。(李登輝さんみたいな人!)
* 日本にやってきた留学生は、日本の軍国主義的観念に陶酔した。中国も軍事的な強国となって外国勢力を中国から排除しなければならないとの考えと結びつき、中国における近代的な軍隊の成立へとつながっていった。

**尖閣諸島と下関条約**

* 尖閣問題は単に島の領有をめぐる問題ではない。尖閣問題は、中華文明と中国という国家が歴史的に受けてきた傷をいやし、みずからの「理想中国」を中心とした上下関係に沿って世界を作り変えようとする戦略の足がかりなのである。
* 日本政府は1895年、国際法上の「先占」理論に基づいて尖閣諸島という無人の島の管理を始めた。これは、今日の中国から見れば、中国が国際法の論理・西洋文明の論理を十分に身につけていなかったがために、いつの間にか尖閣諸島を奪われてしまったことを意味する。そこで、この尖閣問題は、中国文明の西洋文明に対する屈辱の象徴ということになる。この屈辱は晴らさなければならない。
* 一方、1879年に沖縄が日本の一部となった。そのうえで、1880年代初頭に宮古島・八重山諸島の帰属をめぐる問題が発生した。当時の首相伊藤博文は、清国における内地通商権＝中国国内で日本人が商業活動を行う権利を得るため、宮古島・八重山諸島を割譲することを清に提案した(!)。清国この提案を拒否し、その結果、宮古島・八重山諸島は日本領であることが確定した。
* そのうえで、尖閣諸島については、日清戦争で日本の絶対有利が明らかになった頃合をみて、平和裡に先占を開始した。この点について中華民国・中華人民共和国は長年にわたり抗議しなかった。中華人民共和国となってからも中国は、機関紙「人民日報」の1953年1月8日付記事で、尖閣諸島は琉球群島に属すとして自国領ではないことを明確にしている。さらに1950年代末に高等教育機関に配備した中国地図帳においても「尖閣諸島」という日本名称で尖閣諸島を明記している。しかし、尖閣周辺における石油資源の存在が明らかになった1970年頃から中国は突然従来の態度を一変させ、魚釣島の領有を主張しはじめた。
* 2013年、「人民日報」に掲載された論文によれば、中国は沖縄も日本に奪われたという考え方を示している。日清戦争に負けた結果、締結された下関条約により、沖縄も尖閣諸島も台湾もすべて奪われたという考え方を取っている。中国にとっては、沖縄の帰属問題も歴史上未解決の問題である。これは、中国が敗北の近代史を認めないという歴史観の現れである。

以上